

平和主義なエボルトは
ラーメンを愛する。

仮面ライダーロード

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球外生命体のエゴルトは火星を滅ぼそうとするも、パンドラボックスに封印され、その計画は泡となるが…

その先がどうなるのか、まだ誰にも分からないというあらすじ詐欺作品である。

参考にした動画・お店がある場合は大手チェーンを除き、後書きのほうでリンクを貼らせていただいています。

ぜひ美味しそうと思っただければお店に行ってみてください。

目次

火星滅ぶ	1
ラーメン	5
スカイウォール	11
屋台	15
坦々麺	20
ライスの神秘	25
おっ、トツピンググウウ!	31
割引だど!?	36
さすらいのラーメン食べる人	41
ラーメン喫茶への道—01	45
たまにはラーメン以外もいんじゃない	49
?	49

たまにはラーメン以外と合わせて食べます。	54
葛城巧とゆく、ラーメン親子旅	58
ラーメン喫茶への道—02	62
ラーメン喫茶への道—03	66
ラーメン喫茶への道—04	70

火星滅ぶ

やあ、俺はエボルト。

宇宙のありとあらゆる星を滅ぼすのが最近の趣味だ。

今日は火星という星を滅ぼしに来たのだが、警備が嚴重すぎて泣けるねえ。

「さあ、観念するといい。」

『Ready. GO!!』

『エボルティックファイニッシュ!!チャオー。』

「ぬう、はあっ!!」

「「うわあー!!」」

「これで、エボルコブラの力といたたところか。

「ふん。つまらんなあー。もつとこの俺を楽しませろよ。」

「これ以上はさせない。」

「ん？ おつと、これまた綺麗なおねーさんだなー。まあ、ブラッド族にはもつと可愛

いやつはいたが… まあ、いい。俺を倒したいならかかってくるといいさ。火星の王

妃、ベルナージュさんよお。」

「そうか。ならば遠慮なく行こう。はあっ!!」

「火星だけに火の攻撃ってか？　けど、全然火力もないから意味がないんだよなー。」

「バカな…」

「けど、変に技をかけられるのも好きじゃない。これで終わりにしてやる。」

『オーバーTheエボリューション!!』

『コブラ！ライダーシステム、レボリューション!!』

『Are you ready?』

「進化。」

『ブラックホール!!』

『ブラックホール!!』

『エボルブラックホール!!』

『フツハハハツ。』

「な、なんだそのおぞましい姿は…」

「これから死ぬやつに教える必要はない。　　終わりだ。」

『Ready, GO!!』

『ブラックホールフィニッシュ!!』

『チャオー。』

「やむを得ん… パンドラボックス!!」

「ん?なんだその箱は…」

「私もろとも、いや… 火星もろとも封印する!!」

「バカなっ… やめろオー!!」

これが、俺にとつての初めての敗北だった。

だが、俺は諦めない。

このパンドラボックスはいつか何者かの手によって見つかるはずだ。

だから、この箱を手にしたものに憑依することで、こんな場所からおさらばすればいいという事だ。

だから、早く誰か来ないかなー。

《そして時は流れ…》

ん? あれは…

なんだあ?

まさか機械か?

にしても、あの中には何かが生きてるような反応がないな。

でも、あのような機械がある文明ならば、この経年劣化で壊れてしまったエボルドライバーを直せるやつがいるやもしれん。

俺が自力で直そうとしても、光って音が鳴るだけだからなあ。

まあ興味が湧いてきたから、その世界の様子を探りに行くために……

パンドラボックスの隙間から俺の遺伝子の一部を潜ませるか。

我ながらいい案だと思った。さあ、どんな星でどんな文明があるのか楽しみだ。

だが、この1件が、エボルトの人生観を変えていくのだった……

ラーメン

《数日後》

さて、どうやら俺の遺伝子はある星に行き着いたようだな。

おっと…??

遺伝子から送られてきたデータによると…

地球という星で、かなりの文明開化をしているようだ。

地球は恐らく、あの青い星か…

意外とご近所さんなもんだ…

あれぐらいの距離ならあと数年休めばなんとか自力で遺伝子の半分を飛ばせるだろう。

あつちである程度の宇宙技術を利用し、俺の遺伝子を組み込んだ宇宙飛行士をここに来させ、パンドラボックスから俺の遺伝子の回収する。

そうすれば完璧だ。

だが、1度あつちに送った遺伝子もあるが、あれは弱すぎる。

俺が地球とやらに着いた頃にまだ生きていれば回収しておくか。

ん？ 俺の遺伝子がかなりの反応を示しているだど!?
なんだ？

あの木でできたオンボロな乗り物らしきもの：

いや、何か書いてあるな：

この言語はどこかの星の言語に似ているが：

その星の言語で言えば：

ラーメン

俺の知っているラーメンというのは、味の効いたスープ、確か魚や豚などだったか。そういったものを煮込んでできたスープに、麺という小麦粉の塊を細く切り伸ばしたものをに入れて美味しく食べるそうさ。

正直に言うとお食べたことがない。

だが：

これは面白い。

とりあえず、俺の遺伝子を誰かにつかせ、ラーメンとやらを食べてみよう。

お、その生物なんかどうだろうか。

よし、遺伝子1、取り憑いてみる。

シーン

取り憑くことには成功したようだが…

遺伝子の反応がないか…

はあ…（口、）

めつちやラーメン食べたいー!!

ああー、食べたくて食べたくて仕方がない!!

早く来るがいいさラーメンの星地球とやらの生物、ラーメン族よお!!

カムバック!!!

《13年後》

ラーめえん…ラーめえん…

ラーメンめつちや食べたい(; ∇)

いやいやいや、10年前からずっと地球を滅ぼすと覚悟したはずなのに…

ぐううー!!

もう許せん!! 早くラーメン族来ないのか!?

フアサー

ん?

何か来たな…

まさかやつとラーメン族か!?

いや、ほかの星のヤツらの可能性も捨てきれない…

だが、ここで他の星のヤツらに乗り移ればこの葛藤を…

つて、遺伝子とラーメンの回収がまだじゃないか!!

おつと?

あのシルエツトは…

この前の機械ではなかったか…

だが、動きが生物らしい気もする…

何より、あの透け出てる部分から見える顔が何かに似ているような…

あ！ラーメン族かー！！

ついに…

ついにラーメンが食えるぞー！！

早くその体を寄越せえー！！

そして、この箱を破壊しろおー！！

いや、破壊はするなあー！！

よし、こつちだ…

そうそう…

こつちこつち…

『ラーメン！！』

「ラーメン!? つて、うわああー！！」

ふふふ…

体は乗っ取らせてもらった…

さて、早くラーメンとやらを食べに地球に…

ん？

どうやら、こいつの任務を全て終わらせないと、ラーメンを食べるためのお金とやらが貰えないらしいな…

あ、なんだが地球のことが頭に入ってきたな。

なるほど…

とりあえず、任務とやらを全て終わらせ、予定通りとされてる日に地球に戻るとしよう。

それより、この体の主の意識がまだ動いてる気がするのだが…

まあ、ラーメン食べれるならそれでいいか…

この時、エボルトは忘れていた。

自身は星狩りの民で地球を滅ぼそうとしたのに…

いつの間にか欲しがるの民になっていたことを…

スカイウォール

さて：

地球に着いたようだ：

1ヶ月後に、帰還セレモニーとやらをやるらしいな。

恐らくそこにパンドラボックスもあるだろう：

そうだ、思い出したぞ！

俺は星狩りの民、ラーメン族の： いやブラッド族のエボルトだ。

こんなことをしている暇はない！

早く、パンドラボックスを目覚めさせ、ラーメンを食べなければ！！

そうと決まれば早速：

「これでこの体もうまく動けるな。よし、まずはラーメンを食べに行き、エボルトライ

バーの修復をできそうな凄い科学者を探しに行くかー。」

『それはそうと、エボルトさん。』

「ん？ なんだ俺の中のヤツか。 なんだ？」

『娘に会いたいんだけど。』

「そうか……だが、タダで会わせる訳には……」

『○○○町のある立派なお屋敷に凄い科学者が住んでいるのと、その近くに俺も行ったことのあるオススメのラーメン屋がある。』

「その話乗った！ 早く、お前の娘さんのところに連れていけ！」

『俺の娘を優先してくれるあたり、お前も優しい宇宙人なんだな。』

「おいおい、いきなりそんなこと言うなよー。照れるだろー。」

『そうか？ とりあえず、今言った場所は全て俺の脳に入ってるから適当に行ってくれ。』

俺は疲れたから1度寝るぞ。』

「そうか。じゃあおやすみ。」

エボルトは自信が憑依している石動惣一にそう呟く。

そして、エボルトはさらにこう呟く。

「この星の民は優しい。 そうだ、この星を滅ぼすのはやめた…… ちよつと観光して、出ていこうではないか！」

エボルトが、星狩りの民としての仕事を初めて放棄した瞬間だった。

《数日後》

廃品回収はここか…

ポイツ（つっ・ー・）（「エボルドライバー」
これでよしだ。

エボルドライバーもそのうち消滅するだろう。

あとは… パンドラボックスだな…

もしもあれの中でベルナージユが生きてるとしたなら…

助けてやりたい…

ラーメンでなんとかならないか？

ラーメンならば、誰かを救えるはずだ…

『おいエボルトさーん。』

「ん？石動惣一か。 どうした？」

『葛城先生の家を通り越してんぞ。』

「なんだと!? それを早く言ってくれ！」

『今言ったやん…』

＼ピンポーン／

＼ハイ／

ガラガラガラ

「どちら様ですか？」

「あなたが葛城忍先生ですか！」

「え、ええ。そうですか……」

「地球外生命体とラーメンにはご興味ありますか？」

「は？」

「ぜひ、葛城先生と共にラーメンを作り上げたいと思い、火星からやってきました。」

「火星……!?!」

「申し遅れました、俺の名前はエボルト。元星狩りの民のブラッド族の1人だ。」

「そこから辺詳しく……オススメのラーメン屋台あるのでそこでいいですか？」

「もちろんだ！ では、参りましょう！」

エボルトはラーメンで簡単に釣れるようになってしまった。

そんなんでいいのか!?

欲しがりラーメン族のエボルトお!!

エボルトのラーメン道はまだまだこれからである。

屋台

よっ!!

俺はエボルト。

地球外生命体で、欲しがりの民と言われるブラッド族の生き残りの1人だ。

え?お前は星狩りの民だろ? ってか?

そんな訳ないだろ。

今の俺はこの素晴らしい星、地球に住むラーメン族の味方である。

俺は、ラーメンのために自分自身の世界を壊す力をドブに捨てたのだ、

ラーメン作れるようになるまでは諦めず死ねないな!

ちなみに今日はある人物とこのラーメン屋台桐生に來ている。

その人物とは…

「それで、ラーメンの研究に関して、どうして私なんだい? それと、君が地球外生命体と
いうのは本当なのかい?」

と、葛城先生が聞く。

「はい。俺の名はエボルト、元はブラッド族として多くの星を滅ぼしてきた。だが、火

星で封印されてから、暇になっていてる所にこの地球の探知機が火星にやってきた。俺はそこに微量の自分自身の遺伝子を潜り込ませ地球侵略を試みた…」

「なるほどな…」

「だが…」

葛城先生が何かにひたっているのを『だが』の2文字で引き止め…

「あの日、ラーメンに出会ったんだ。運命だと思ったよ。」

「それ、私が妻に、息子が彼女にプロポーズした時のセリフに似ているな…」

いや、そんなこと聞きたかねえよ。

てか、息子いたのか。

「とりあえずだ。あれは俺にとって、地球侵略なんかしたくないと思わせる凄い一品だった。だから俺は遺伝子を憑依させたやつにラーメンを食べさせようと思った。」

しかし、その憑依させた人間は倒れてしまった。」

「その男の人、大丈夫だったのか？」

「いやそれがな… 何やかんやで時が流れて産気づいたみたいでな…」

「その人女性だったのか!？」

「それで、そいつの子供が生まれて以来、遺伝子からの情報は途切れた。」

言っていないかったが、遺伝子を潜り込ませてから約13年間もの間、遺伝子との通達

が出来なかったのだ。

もしかしたら、生まれた子供に俺の遺伝子が移った可能性がある。

記憶をかつぽじってどこかの家の人か思い出さないと…

「お待たせしましたラーメン二人分です！ごゆっくりー！」

「おつ、来たようだな。」

「(。m。;) ゴクリ…」

「どうしたエボルトさん?？」

「念願のラーメン…13年もの月日を待ちわびたラーメン… もう食べていいのだろう

か…」

「ラーメンは早く食べないと麺がスープを吸って伸びてしまうし、お金はもう払ったろ

? だから、もう食べても問題ない。」

「そうか！ では早速… いただきまーす!!」

俺は割り箸を割り、麺を口に運ぶ。

「この面の硬さ、程よい硬さでとても食べやすく美味しい！」

そして俺はレンゲでスープをすくい、口に運ぶと…

「(、)これは…」

醤油とんこつ!!

ラーメン!!

ベストマッチ!!

「もうこれは… 思い残すこともう無し…」

「ラーメン一口食べたぐらいで死ぬなエボルトオオー!!」

葛城先生の声が聞こえる。

『そうだぞお前!! てか、お前が死んだら俺も死ぬんじやねえのか!!』

俺が憑依している石動惣一がそう精神に語りかけてくる。

ああ… こんなにもラーメンが美味しいとは…

「お客さん!! あんただけだよ… うちのラーメンで昇天してるのは!! もうお代は返

すから好きなだけ食べていってくれ!! (感激泣き)」

なんと店長がそう言って、二人分のラーメンのお代を置いてきた。

ん?好きなだけ食べれる?!

「そ、そうか… では… 味噌でもラーメンがあるのか!!では、味噌ラーメンも一杯頼めるか?」

「はい!喜んで!!」

と、店長は大喜びで味噌ラーメンを作り始めた。

そういうえば、ラーメン屋台での店長というのは大将とも言うらしい。

なら、言い改めて…

大将の心の大きさ、まるで銀河のようだ…

「何この大将と客。」

自分だけがまともなのではないかと疑う葛城先生であった。

坦々麺

よっ！

久しぶりだな!!

俺の名前はエボルト。

このラーメン族の住む惑星に降りたつた俺はラーメンマスターになったのだ。
なんだ？

ラーメンを1回食べただけでラーメンマスターを名乗るな??

ふんっ、ラーメンの極意はもう味わった。

俺がこれからエボルトラーメン時代を：

忍「いやでもあんたはまだラーメンマスターじゃない。」

エボルト「なに：!？」

惣一『なんならまだまだお子ちゃまだ。』

エボルト「つ皿、）。。。。。*：。。。。：*。。。」

何故だ：

俺は豚骨ラーメンと味噌ラーメン、醤油ラーメンをコンプリートしたはずなのに：

忍「坦々麺って知ってるか？」

エボルト「タイタン麺? ああ紫の…」

忍「それはクウガ。坦々麺っていうのは唐辛子とかの辛いものが効いたピリ辛ラーメンだ。たまに香辛料爆盛りの激辛ラーメンなんかもあるな。」

エボルト「なるほど… 地球はやはり素晴らしいな…」

忍「では食べに行こうか。」

エボルト「楽しみだあ。」

《ラーメン桐生》

忍「大将、坦々麺二人分。」

大将「あいよー、ってこの前のお二人じゃないですか!! いつもありがとこぜーます!!」

エボルト「こちらこそ、美味しいラーメンが食べれて幸せだ。」

大将「その言葉、励みになるっす! じゃあ少々お待ちくださいせえ!!」

忍「すっかり私達は常連だな。」

エボルト「だな。だから人間は面白い!!」

大将「人間が面白い、お兄さん、哲学かなんかにご興味でも?? アチチ」

エボルト「お兄さんだなんて歳じゃないさ。まあ、哲学もまた人間の美かもしれん

な…」

忍「(どうしよう…)エボルトつて地球征服しに来た地球外生命体だよな? 地球の文化に親しみ持ちすぎて大変なことに… 大丈夫かエボルト!! つていう声がどこからか聞こえたような…)…」

人間が面白いというのは、いい勉強になったものだ。

それにしても坦々麺、いかがなものか…

どうせ人間の食べ物だ…

大将には申し訳ないが、100点満点中40〜60だ r…

大将「坦々麺2人前お待たせしやした!! ごゆつくりどぞー!!」

エボルト「うん! いい香りだ100点満点中1万点だあ!!」

なんだこの辛さを彷彿とさせるようなキツイ刺激の匂いは…

だが、それが何故か食欲をそそる…

まだ食べていないのに美味しさが伝わってくる…

何故だ…

何故こんなにもラーメンは奥深いのだろうか!

俺はまだラーメン好きの足元にも及んでいなかったというのか…!!

なら精進あるのみだ!!

エボルト「よし、食べるぞ…の前に、いただきます。」
読者「いただきますを言った!？」

忍(また何か聞こえたような… まあいい、私も食べるか… うん、やはり美味しい。
この言葉に尽きる。)

俺は恐る恐る坦々麺を口に運んだ…

んんっ!! 辛い!!

だが、美味い!!

コシヨウもなかなか効いていて美味しい。

いや、この坦々麺を語れるのはこんな言葉じゃない。

この麺の硬さ、もやしの新鮮感、スープの辛さと美味さ、そしてこの雰囲気… 全て
が最高だ!!

また、トッピングでちよいと乗っているネギもまた風情を感じる。

ああ、地球に来て良かった…

ここはもう…

HEAVEN…

忍「声、盛れてるぞ。」

エボルト「な、なに!？」

大将「そんな風に言っていただけなんて… もう… 生きてて良かったっす!!」
何やかんやで少しの恥はかいたが、とても美味しかった。

ライスの神秘

《翌日の朝》

忍「ふわぁー、おはようエボルト。」

エボルト「おはよう忍先生。」

忍「今日もまたラーメンを食べに行くのか??」

エボルト「もちろんだ。」

忍「そうか。だが、ラーメンばかりでは体に悪い。今日は白米を食べよう。」

エボルト「え・・・白米?? 嫌だ嫌だ、ラーメン食べるー、白米イヤー!!」

忍「エボルトが幼児退行している・・・まあまあ、人の話は最後まで聞こうか。」

誰もラーメンを食べてはいけないとは言っていないぞ。」

エボルト「え?」

その時だった。

??? 「もう父さんたち朝からうるさい!! 静かにしてよ!!!」

忍「あ・・・巧・・・すまんな・・・」

巧「反省しているなら別にいいよ。それと、石動さんでしたっけ?? 父がいつもす

みません… ご迷惑をおかけしてないならいいのですが…

エボルト「いやいや、お世話になってるのはこちらの方だ… です。」

巧「それならよかったです。じゃあ僕は学校行ってくるから、家の鍵ちゃんと閉めてねー。」

忍「はいはい。」

巧「じゃあ、行ってきまーす。」

忍「行ってらっしやーい。」

エボルト「仲いいんだな。」

忍「そうでもないさ。とりあえずラーメン行くんだろ？」

エボルト「もちろんだ。」

忍「じゃあ身なりを整えてから行くこうか。」

エボルト「わかったぞ。」

《数十分後》

忍「では昨日のお店に参ろうか。」

エボルト「了解したぞ。」

てくてくてくてくてく……(割愛)

大将「いらつしやーせー。あ、葛城さんに石動さんじゃないっすか!!こんな早い朝から来てくださったんですね!!」

忍「うちの連れが行きたいと駄々をこねてな。」

エボルト「ぐぬぬ……」

忍「とりあえずラーメンは何を頼む??」

エボルト「うむ…… 醤油ラーメンだな。」

忍「では私は味噌を。それとライスの並盛と大盛を一つずつ頼む。」

大将「了解しやしたー。少々お待ちくださいー。新入りー、醤油ー、味噌ー、ラ

イス並ー大ーだ。」

新入り「了解した。注文に対していいものを届ける、それが人間の飲食店のルールだろう。大将、マッテローヨ。」

大将「お、おう……」

変わった店員がいるんだな。

なんというか、キャラが濃いつていうか。

忍「やはりいつ来てもいいお店だ。」

エボルト「人間じゃない俺にも分かる、やはりラーメンとラーメンをつかさどる者はすごいな・・・」

忍「それは大げさじゃないか?」

新入り? (人外・・・俺と一緒に。おっと、これ以上は麺が柔らかくなってしまう。危ないところだった。)

大将(こいつ、今日からの新入りなのに：できる・・・下手したら俺より腕がいいんじゃないか・・・面接のときに、人じゃないとかロイミュードだとか言っていたが、本当なのかもしれない・・・これはすごい人材だ・・・)

新入りロイミュード「大将、麺が茹で終わつたぞ。俺はライスやるからあとは任せたぞ。ヤツテローヨ!!!」

大将「ワカッターヨ!! (あ、今ノリに乗せられてしまった。)」

エボルト「店員同士が仲がいいお店は和むな・・・」

忍「そうだな。」

大将「お待たせしましたー、醤油と味噌、ライスのと大盛各一点ずつです、ごゆっくりどうぞー。」

エボルト「では早速…」

大将「実はうちのラーメン、ご飯との相性も考えてまして、この取り皿にご飯を持ってもらって、そこにラーメンのスープやチャーシューを乗せてもらったらすんごくうまいですよー！」

忍「そうか…では早速…」

エボルト「(、↓、*)() ヨイシヨツ」

忍・エボルト「美味い!!」

この後どうなったかはご想像にお任せします。

ただ…

《葛城研究所》

研究員「葛城先生…ニンニクの匂いすこいつすよ…」

忍「あ、すまんな。」

研究員「それと、あれ誰ですか？」

エボルト「俺か？」

忍「彼のハンドルネームはエボルト、私たちの強い見方さ。アハハー」

研究員「この人たち、絶対ラーメン食べてきた帰りでしょ… 葛城先生も息子さんも

ラーメン大好きだしな…」

いつも通りである??

おっ、トツピングウウ！

エボルト「今日の仕事はもう終わりか？」

忍「そうだな。今日の晩御飯は趣向を変えて餃子の王しよ…」

エボルト「ラーメンレッツゴー！」

忍「知ってた。」

《数分後》

また同じ店にやってきた。

相変わらず、大将と新入り店員の2人だ。

エボルト「さて、今回はどんなラーメンの心得を…??」

忍「そうだな。特に考えてなかったな…」

？「進兄さん!! このトツピングいいんじゃない??」

???「お、おい、剛!!それは入れすぎだろ…ん、美味しいな!!」

新入り店員「お前達、相変わらずうるさいな。」

？「チエイヌ…お前生きてたのか…」

???"「そ、そうだ!霧子に連絡しねえと…ポチポチ あ、もしもし霧子か!?チエイスが!!チエイスがラーメン屋で…」

新入り店員「食べる時の声量はほどほどに、それが人間のルールだろ。」

?「あ、俺も姉ちゃんに電話しねーと…」

新入り店員「こいつら聞く気ないだろ絶対。」

なんだか騒がしい連中だが…

なんだか時空が歪んでいる気がした。

今は2007年のはずだが…

まあ、いいか…

忍「ん?どうしたエボルト。」

エボルト「あ、ああ… あいつらがトッピングがどうか言っていてな…」

大将「トッピング…それは…」

うわビックリした!?

急に大将が俺の背後に…

ラーメン星の民、恐るべし…

大将「ラーメンやライスに付け加えたりして、ラーメンの味を自分好みに調整したり、豪華にしたり出来るんすよ。例えば、そこに置いてあるコショウ。醤油ラーメンとかと

相性がいいですね。コシヨウの風味が食欲をかきたたせるつす。次に、塩。まあ、これは塩ラーメンの塩を濃くするためのものつすけど、うちの常連さんはライスにかけたりしてくださってるつすね。特に、その科学者さんは…」

忍「わ、私の顔に何か…?」

大将「あと、有料トッピングもあるつすね。ネギマシマシ、チャーシュー大盛り、ノリ大量、コーン爆盛り、もやし爆盛りなど、うちはトッピングに関する情熱も他とは少し違いやす。まあ、こちら辺は有料トッピングなんで、よくお財布と相談して欲しいつす。」

エボルト「なるほど…解説ありがとう。」

そうと決まれば…

↑………(・ω・) ジーツ

忍「何故こちらを見つめる?」

エボルト「お財布と相談と聞いたからな…」

忍「私は財布だと言いたいのか?? ソウデスネ。」

エボルト「せっかくなので、豚骨ラーメンにノリとチャーシューを盛るか…他はまた別の機会にしましょう。」

忍「分かった。では私は味噌ラーメンにして、もやしとコーンを爆盛りにしてもらお

うか… 大将、注文…」

大将「ノリとチャーシュー大盛りの豚骨ラーメン、もやしとコーン爆盛り味噌ラーメン、つすね。少々お待ちください。チエイスー、麺はー。」

新入り(チエイス)「準備完了、あとはトッピングを頼む。モツテローヨ! あと、そろそろシフト的に帰らせてもらうが大丈夫か?」

大将「ええで(イケボ)カエツテローヨ!」

新入り「恩に着る。行くぞ進ノ介、剛。ツレテローヨ!」

??(進ノ介・剛)「ちよ、引つ張るなー!!フクノビール!!」

最後の最後まで騒がしい奴らだ…

大将「はい、それぞれラーメンお待ちしやしたー。」

1分も経ってなかった気がしたのは置いておこう。

そしてお味の方が…

やはりノリとチャーシューが増えただけ。

されど、侮れない…

何故だろ…

乗っている量が多いだけでこれほどまでに空腹を誘うものなのか…

何故だ…

何故なんだ…

忍「うむ、コーンが甘いな… これはどこのコーンですかね？」

大将「猿渡ファームで採れた新鮮なコーンです。最近はその科学の発展のおかげで新鮮な野菜が早く届くんで、科学者様様ですよ。」

忍「恥ずかしいな…」

大将（この人、物理学かなんかの人だったよね?? まあ、心に留めておこう…）

エボルト「やはり…ラーメン屋は素晴らしい…」

明日もぜひ来たい…

忍「そういえば、石動家には帰らなくていいのか？娘さんいただろ？」

エボルト& amp; 惣一「あ。」

To Be Continued

割引だと!?

さて、トッピングも学んだし、もう俺には怖いものはないだろ。

あ、よっ！俺はエボルト。

地球外生命体だ。

そういえば、俺は地球外生命体だったな。

まあ、そんなことより、ラーメンだ。

今日は大将から新作があるのかなんとかで食べに来て欲しいと言われた。

しかもタダで。

忍「新作かー。楽しみだな。なあ、エボルト??ん？ どうした急に俯いて。風邪か？

考え事か？」

エボルト「ああ、考え事だ。」

忍「お前が？珍しいな。」

エボルト「実はだな…こいつの体をずっと借り続けるのがちよつと気が引けてな…」

忍「そういうことか。なら、何か抜け殻作るからそこに入れば動けるか？」

エボルト「いけると思うぞ。じゃあ頼んでもいいか？」

忍「ああ。任せておきなさい。おつ、もうすぐ着くぞ。」

エボルト「本当か、楽しみだあ。」

だから、ラーメンは最高なのだ。

そういうえば、俺はこの星に何をしに来たんだったか：

まあ、いいか。

そのうち思い出しても、命に関わることでなければ何もやらないうら。

大将「お、御二方！お待ちしてやした！」

忍「こちらこそ、待たせたな。新作が一体どんなものなのか楽しみなのだが、どんな

感じなんだ？」

エボルト「俺の言いたいこと全部言われた…」

大将「とりあえず、お二人に食べていただきたいのが、この熊本ラーメン！」

エボルト「熊本？ラーメン？？」

忍「解説しようか。豚骨ラーメン発祥の地である福岡県久留米市から、熊本県玉名市を経て、熊本市とその周辺地域に伝播したラーメンで、麺も太く、スープには豚骨に鶏ガラを使うが、豚頭骨のみでスープを取る店も少なくない。また、スープにチツプ状にした揚げにんにくやマー油、フライドガーリックなどを入れるのも特徴である。このため、豚骨のアクが強い博多ラーメンなどに比べマイルドな味わいとなっている。」

大将「Wikipedia:」

エボルト「Wikipediaってなんだ？」

忍「まあまあ… とりあえず、食べさせていただけようか。」

大将「了解つす！少々お待ちくださいえ！」

エボルト「Wikipediaってなんなんだー!？」

【数分後】

チエイス「待たせたな、熊本ラーメン二人分だ。大将は新しい新入りの面接をしていて、手が離せないらしい。食べ終わったら感想を俺に教えてくれ。ユックリシローヨ！」

エボルト「おお。麺が太い。」

忍「よし、食べるか！」

エボルト「いただくぞ！」

【割愛】

(理由と致しましては… 作者が熊本ラーメンをまだ食べたことがないから、描写無理です。 本当に申し訳ない!!)

忍「美味しかったな。」

エボルト「ほんとだな。だが、まだちよつとお腹が空いててな……」

チエイス「なんだ、食べ終わったのか。どうだった。」

エボルト「【割———愛】」

忍「また食べたいと思ったよ。」

チエイス「そうか。なら良かった。これは俺が初めて大将に認めてもらえた俺のラーメンだ。嬉しいというのが、人間の感情だろう。これは謝礼だ。」

忍「割引券か。ありがとう、また次に来た時に使わせ……」

エボルト「今使えるのか?!?!」

チエイス「もちろんだ。」

エボルト「よし分かった! 食べるぞ!」

忍「おいしい、財布置いてきたんだけど……」

エボルト「じゃあそのポケットの財布はなんだ?」

忍「(???) グツ…… 財布だよ……」

エボルト「なら話は早い! 味噌ラーメンを頼むぞ!」

チエイス「分かった、客の注文を承ったらそれを作るのが、飲食店のルールだ。マツ

テローヨ!」

今日もまた、ラーメンである。(語彙力)

さすらいのラーメン食べる人

よっ！久しぶりだな！

俺は地球外生命体のエボルト、今は帰るべき我が家に向かっているところだ。

エボルト「久しぶりだなー味噌汁ー」

美空「いや味噌汁じゃないし！今までどこ行ってたの！」

エボルト「ラーメン食べてた」

美空「はあ？」

こいつとソラマメ仲悪いの…？

惣一（いやこんなに反抗的な子ではなかったんだがな…あとソラマメじゃなくて美空だ。）

おつとすまねえ、ミソラか…覚えられねえ。

惣一（いや頑張れよ。あ、今日は美空の相手をしてやりたい、ラーメンは無しでいいか？）

インスタントのやつはダメか？

惣一（…仕方ない許そう。）

一方その頃……

新入り店員「割引券を使われたらしっかり割引する、それが人間のルールだろ。」

警察のお兄さん「いやチエイイス、割引券使っていないだけだ……」

新入り店員「俺からのサービスだ、サービスは素直に受け取る、それが人間の善意だろ。」

警察のお兄さん「お、おう。」

新入り店員「お釣りは120円だ、また来てくれ。」

警察のお兄さん「ああ、ありがとなチエイイス。」

新入り店員「また来てくれ。」

詩島の弟「とりあえず俺のお会計はほい、1000円で。」

新入り店員「足りないぞ。」

詩島の弟「は？」

新入り店員「割引券があるならまだしも、お会計は1020円だ。」

詩島の弟「え、ええ……」

新入り店員「早くしてくれ、あとがつかえてしまう。」

詩島の弟「チエイイス：お前後で覚悟しろよ：ほい1020円。」

新入り店員「ちようど預かった、また来てくれ。」

詩島の弟「くつ：美味しいからついつい来ちまう：くうう…」

新入り店員「今日も売上は上場、いい日だ。大将がいないことを除けばだが。」

緑の??「すいませーん」

新入り店員「ん？」

緑の??「大将監修、黒風の豚ラーメンのカップ麺ってまだあります？」

新入り店員「まだまだいっぱいある、どれぐらい必要だ？」

緑の??「じゃあとりあえず15個で！」

新入り店員「わかった、少しその倉庫から取ってくる、マッテローヨ。」

緑の??「あざっす」

黒の??「おい蓮、ホントに15個でいいのか…？」

緑の??「いいんだよ、給料日まだ先だからここで買い溜めると金がなくなっちゃう。」

黒の??「ほお…この剣をB〇〇K・〇FF辺りに売れば儲かりそうだが。」

緑の??「やめとけ」

新入り店員「お待たせした、大将監修の黒風の豚ラーメン16個だ。1個は俺のオマ

ケだ。」

黒の?? 「おお、助かるなあ」

新入り店員 「今日は何かコスプレのイベントでもあるのか…??」

緑の?? 「あ。え、はい。」

新入り店員 「そうか、今日は客が来そうだな。おっとすまない、会計は1500円だ。」

緑の?? 「じゃあ2000円で。」

新入り店員 「500円のお釣りだ、また来てくれ。」

緑の?? 「あざます」

新入り店員 「ふう… そういえば今日は来てないな、石動惣一というやつは。珍しい日もあるものだ。」

惣一（言うと思った。）

にしてもこのラーメンヤバイ。

レンゲがスープの上に立っっちゃってる…

もうスープは食べ物だよこれ…

エボルト「ゴクリ…いただきます、それが人間のルールだからなあ」

惣一（ゴクリ言わんでええ、あと人間のルール真似せんでいい。）

<その頃>

新入り店員「ハックション」

我が救世主「どした、風邪か？」

新入り店員「誰かが噂してるのかもしれない…と言ってみるのも人間のルールだ。」

我が救世主「そんなルール聞いたことない…というか、ロイミュードでもくしやみは

するんだな。」

新入り店員「気にするな」

我が救世主「気にするわ」

<戻って愛知>

エボルト「ご馳走様… うわやばいこれすごい」

惣一（明日…お腹やばそう…）

たまにはラーメン以外もいいんじゃない？

よっ！

俺は地球外生命体のエト：

割愛しますのでしばらくお待ちください。

お待ち。

それはそうと今俺は我らが葛城先生の研究の手伝いというかモルモットにされてい
る。

研究員D 「君は私たちにとって最高のモルモットだああ!!アハハアア!!」

研究員P 「うるさい、ポパピペナルテイ、退場。」

ゴフツ！つて強い腹パンが繰り返される。

てか俺別にモルモットではないし。

研究員D 「グオツ」

大丈夫か…？死んでないか…？

研究員D 「私はア…不滅だああ！」

研究員P 「不潔の間違いでしょもう…あ、お昼ご飯行つてきますー」

研究員D 「私の心は水晶のように綺麗…不潔などではなあi…」

研究員P 「黙りなさい！」

研究員D 「ブウン!!?」

忍「・・・」

エボルト「どうしたあ? 忍先生。」

忍「今日も愉快だなあ…巧に子供ができたら…こんな風に和気あいあいとした日常を送りたいもんだ。」

エボルト「俺との子供は何人欲しい?」

忍「うん…2人かなあつておい誰がお前と結婚するか、俺にはもう妻がいる、巧もいる、満足だ。」

エボルト「幸せそうで何よりだ、それはそうの今日のラーメンは…」

忍「たまには米を食べろ、という事で餃子の王様に行く。」

エボルト「餃子の王様か。餃子… ラーメン…」

忍「せっかくも地球に来たんだ、他のものも食べてみる。」

エボルト「ぐぬぬ…というか、この前米は食べただろ！」

忍「もう4話ぐらい前の話だ。」

エボルト「やめろ。」

忍「ちようど2年前の今日だ。」

エボルト「メタい話はするな、そういうのはあとがきとかでやるもんなんだよ…」

忍「すまんすまん、それに今回はただの飯ではない。チャーハンあるだろ？」

エボルト「あああれか。」

忍「ラーメン屋のラーメン以外のメニューといえばチャーハンと餃子だ。なら、先にガチガチのチャーハンと餃子を食べに行かないか？つて話だ。」

エボルト「よし乗った。」

忍「おお！本当か！ついにエボルトがラーメン以外のものを食べる…」

惣一（俺割とラーメンばかりはキツかったんだよねえー、助かるわー。）

この時、人間2人は忘れていた。

餃子の王様には…ラーメンがあることを…

<餃子の王様>

店員「いらつしやいませー、2名様ですか？こちらどうぞー。」

エボルト「餃子の王様かあ…ん…？」

これはラーメンをすすする音…

まさか…

忍「とりあえずエボルト、何を食べる?俺は炒飯定食にしておう。最近歳をとったからか胃が結構きつくてな…いやこんな話はいいんだ、せつかくなら他の麻婆豆腐とか唐揚げとかもいいんじゃないか?」

エボルト「・・・」

忍「大丈夫だつて、チャーハンも分けてやるし、餃子も頼むつて。」

エボルト「・・・」

忍「ん?どうしたーエボルト??」

エボルト「・・・メン…」

忍「メン…??　　そういや揚げそばとかもあつたなあ、懐かしい…最後に来たのいつだったか、巧のテスト祝いだつたかなあ…」

エボルト「こつてりラーメンがあるじゃないか!」

忍「」

エボルト「すみませーん、注文お願いしまーす!」

店員「お伺いします。」

エボルト「こつてりラーメン1つと…忍先生はどうするんだ?」

忍「あつ・・・炒飯定食とミニサイズの味噌ラーメンで…あ、あと餃子2人前…」

店員「かしこまりました、ありがとうございます。また何かありましたらこちらの

ベルでお呼びください。(ベル使わずに呼ぶ人久々に見た…)

エボルト「楽しみだなあー」

次回―実食編

たまにはラーメン以外と思わせて食べます。

t a k e 1

前回のラブ…

t a k e 2

前回の荒巻… いや誰だよ

t a k e 3

前回のあらすじい…ブウウラアア!!

忍と共に餃子の王s y…ゲフンゲフン 餃子の王様に来たエボルト。そんな彼は偶然ラーメンのメニューを見つけてしまう。

たまにはラーメン以外もいんじゃない?と来た餃子の王様なのにラーメン食べちやつてるじゃねえかばあかたれが。

というわけでこれじゃあ話が進まなそうなので実食編へ、g o !

<実食編>

エボルト「はいおつー」

忍「なんだ?煽りか? まさかお前…ラーメン頼んじまうとは思わねえよ…空気を読

んでくれよ…」

エボルト「だがラーメンに勝るものはない。」

忍「ラーメンに勝るもの探してんのにラーメン食べてたら意味無いでしょう。」

エボルト「ラーメンの勝ち。」

忍「ラーメンが勝ちちゃったよ。」

エボルト「ラーメンしか勝たん。」

忍「なにになにしか勝たん！ってそれ最近受付嬢の間で流行ってるやつだな。」

エボルト「美空が学校で流行ってるって」

忍「へえ…流行ってどこから来るんだろうなあ。」

エボルト「さあな？だが地球に来て、人間の面白さをいっぱい知れて良かったよ。」

忍「そうか…ちなみに地球に来て一番良かったのは？」

エボルト「ラーメン」

忍「だよな。うん、知ってた。」

前回と違うメガネの店員「お待たせしました、炒飯定食とミニサイズの味噌ラーメンです。こつてりラーメンと餃子は次お持ちしますのでしばらくお待ちください。」

ほかの渋い声の店員「ウウツウミイ、早くしないとどんどん溜まってくぞおー」

ウウツウミイ「あ、はい！では、失礼します。」

エボルト「……」

忍「・８・」

エボルト「ウウツウミィ〜」

忍「確かにさっきの店員お前と声似てたけどな」

エボルト「シノオブウ」

忍「やめて：…なんか気持ち悪いやだ。」

エボルト「それより早く食べないと冷めるぞ？」

忍「あ、そうだった。いただきます。モグモグ お、さすがは餃子の王様、チャーハンが美味しい。食べるか？」

エボルト「そんなに言うなら食べるが：モグモグ これは美味しいな。ラーメンとも合
いそうだな。」

忍「よし、じゃあ俺は味噌ラーメンを： お前の分を取り皿に分けてだな：」

エボルト「今日の忍先生やけに優しいな。」

忍「まあたまにはなっ。 それにお前には感謝してるんだ、色々と働いてもらって：
楽しそうに笑って： 今まで研究所やうちの家がしんみりしてたのが嘘みたいだ。」

エボルト「そうかそうか、じゃあこれからもラーメン食べて盛り上げないとな。」

忍「ああ、そうだな。」

と俺たちは味噌ラーメンをズズっとすすする。

味噌ラーメンは俺が1番好きなラーメンスープの種類だ。

やはり身に染みる…

内海「お待たせしました、こつてりラーメンと餃子2人前です、ごゆつくりどうぞ。」

エボルト「お、俺のこつてりラーメンだ…くう…この脂のライブ感、たまらねえ！」

忍「脂のライブ感でなんだよ…」

エボルト「だが麺にこのスープが絡む感じ、この濃すぎるスープ、もう最高のライブだ。」

忍「ライブ…ねえ…」

エボルト「それと餃子も食べようぜ。」

忍「確かにそうだな、アツアツのうちが美味しい。」

そして今日もまた俺たちはラーメンをすすする。

葛城巧とゆく、ラーメン親子旅

やあ皆さん、こんにちは。

葛城忍です。

読者の皆様はいかがお過ごしでしょうか。

私は今、大変ラーメンが無性に食べたくてムズムズニンニンしています。

なので息子と共にラーメンを食べに行きたいと思えます。

の前に、まずは交渉ですね。

忍「巧ー、ラーメン食べに行かないか？」

巧「父さんの奢り？」

忍「もちろん。」

巧「火星の人は？」

忍「今日はあいつだけ仕事だ。」

巧「ふーん。なるほど、分かった、行こう。」

忍「よし。どんなラーメンが食べたい？」

巧「そうだな… 塩ラーメン食べたいかなあ。」

忍「おお、じゃあどこかチェーン店にでも行こうか！」

巧「お、アリアリ」

この時この親子は忘れていた。

京香「私は…置いていかれるのね…残念。」

自分の母親／妻を置いていってしまったことに…

<とあるラーメン屋>

客D「ここが…ラーメンの世界か…??おかしいな、ビルドの世界じゃないのか…そしてこの格好、評論家かなにかか？」

客K「でも、今回は俺もコスチュームチェンジしてるのか…」

夏蜜柑の客「2人とも似合ってますね。」

ヤンホモ「ちなみにここ、ナマコはないみたいだね。」

客D「あつてたまるか。まあこの世界で何をすればいいのか分からないが、早速店に入ろうか。」

巧「あの人たち、もしかして異世界から来た人なのか…」

忍「巧、ライドウオッチとかいうやつを読みすぎなんじゃ…」

巧「ライトノベルね。いや別に読みすぎではないよ。」

忍「まさか高校生になっても厨二病を引きずっているとは……」

巧「なわけない。それよりも後がつかえたらマナー違反だから、さっさと入ろ。」

忍「そうだな。あ、アルコール消毒は大事だぞ読者の諸君。」

巧「父さんこそ異世界とか火星の宇宙人とかに語りかけて……父さんの方が厨二病だよ……あ、塩ラーメンひとつ。」

忍「厨二病とは失礼だな……坦々麺ひとつ。」

巧「あ、ついでに唐揚げも。」

店員「オツケイチョットマツテヨ、チエイサーン」

どこかで見た店員「任せろ、素早く提供する、それがこの店のルールだ。」

店員「タスカツチャウネアノシンジン。」

客D「注文いいか？」

店員「イマイクデスヨー」

客D「俺は……味噌ラーメン。」

ヤンホモ「じゃあ俺は揚そば、あと食後にかき氷のブルーハワイ。」

客K「じゃあ俺はキムチチャーハン。あと俺も食後にレモンのかき氷。」

夏蜜柑「私は……そうですね、ませそばで。あ、あと食後にグレープパフェ。」

店員「ワツカリマシタチョットマツテテネ」

客D「ドライブの世界で借りパクしたシンゴウアックスの声みたいだな。」
どこかで見た店員「すぐに仕上げる。」

客D「あいつ…ドライブの世界にいなかったか…？」

ヤンホモ「僕と同じできつと士のことをつけてるんだよ。ストーカーだね。」

客D「お前、自覚あったのか。」

巧「隣の席の人、ストーカー集団なのかな。」

忍「深く気にするな。坦々麵、この辛さがいいんだよなあ。」

巧「へえ、一口ちようだい。」

忍「いいぞ」

周りの客（イチヤコラしやがっててえ）

客D「ここは…ホモの世界か…？」

ラーメン喫茶への道—02

よっ！

俺は地球外生命体のエボルトだ。

最近、とあるYouTubeとやらの動画にハマって様々なラーメンを食べに行ってるんだが…（2回目）

<とある秋葉原のつけ麺のお店>

エボルト「おお並んでる。」

惣一（さすが秋葉原だな。）

エボルト「食券を買ってから並ぶシステムか。とりあえず先に買うか。」
と思い、食券機の前に立つ。

ん？これは…

エボルト「1kgのつけ麺…食べるしかない…」

食券機の1番上に配置されたつけ麺のボタン。そこにはスタッファイチオシと書いてあった。

惣一（俺の歳考えて。）

エボルト「とりあえずこの濃厚つけ麺を頼もう。スタツファイチオシと書いてあることだし。」

惣一（無視するな俺の胃が死ぬ。）

エボルト「食券を買ってつと： よし」

惣一（よしじゃねえ：俺の意見ガン無視かよ：）

エボルト「まあまあいいじゃねえか。イチオシだぜ？」

惣一（くう： 地球外生命体も期間限定とイチオシには弱いのか：）

エボルト「それはそうと、食券機を使うのは初めてだったから緊張したぜ。」

惣一（ああ確かに、お前が来てから食券のお店に行つてなかった。あ、牛丼チェーンの〇屋つてところがあるんだが、そこは食券のお店なんだ、今度行かないか？）

ちなみにラーメンはあるのか？

惣一（ない。）

じゃあパス。

惣一（だよな知ってた。）

とそんな会話を心の中でしていると席が空いたらしい。

店員さんの誘導に従つて席に座り食券を渡す。

このお店では食券が発行されると、その内容が厨房に直接届き、麺を予め茹でておく

など、時間短縮をすることによってスピーディーな接客、そして客の回転率の上昇を目指しているらしい。

エボルト「人間ってのはすごi…」

普通の店員「お待たせしました」

エボルト「全然待つてないです」

普通の店員「あ、そうですか？ w あ、スタツファイチオシ！ i k gつけ麺です。そちらのトッピングはご自由にお使いください、では失礼します。」

トッピング： あ、んにくチップ。

惣一（明日仕事だったら周りに嫌われるやつな。）

エボルト「でも美味しいんだろ？」

惣一（認めざるを得ない。）

エボルト「せいじやいただきます。まずは麺を単体ですずつと行かせてもらうぜ。

しっかりと水でぬられてるからぬるりと口に入りつつもコシのいい麺だ… そして

次はつけ汁…つて2つある？」

惣一（片方は豚骨、もう片方は魚介みいだな。）

エボルト「ならまずは魚介だな。ズルル さつきよりも口にすすつと入っていくぞこれ…しかも入っているネギがいいアクセントを効かせている…」

惣一（次は豚骨だな。）

エボルト「そうだな。ズズズ　!!?! つけ汁が麵に絡んで旨み濃厚なつけ汁だぞこれ…
さつきまではぬるりするりだったのが今度はドウルリだぞ…　地球やべえ…」

惣一（それで、にんにくチップは？）

エボルト「さあどっぷり入れるぞ」

惣一（いや待て入れすぎ…）

<その日の夜>

美空「お父さんクサイ、はいブレスケアバイバイ。」

惣一（美空ああ…）

エボルト「自業自得だな」

惣一（それ本人が言っただけどうするんだよ…）

ラーメン喫茶への道—03

よっ！俺は地球外生命体地球育ちのエボルトだ！

今日は天下一品に向かつてるぜ。

天下一品、通称《天一》。

かなりのコツテリ度のスープが人気のチエーン店。

元は1つの屋台から始まった誰もが知ってる名店である。

ちなみに今日はゲストがいるんだ。

チエイス「暇か聞かれたと思ったらやはりこういうことか。」

エボルト「人外同士、ラーメン食べながら語ろうじゃねえか。」

チエイス「少なくともお前の場合その体は人間のものだろう。」

エボルト「ま、まあそうだが…」

チエイス「借りたものは返す、人間のルールだろう？いつかはその体、自由にしてやれ。」

エボルト「まあそのうちな。」

チエイス「不幸だな体の持ち主は。」

エボルト「ちなみに今日h…」

チエイヌ「天下一品だろう、このルートでどこに行くかぐらい分かる。」

エボルト「そうか…」

チエイヌ「俺はこつてり派だが…今日は味噌ラーメンを食べようと思つてな。」

エボルト「自分の店の参考にするのか？」

チエイヌ「まあな。1回食べただけではすぐに落とし込める訳では無いが…」

エボルト「バイトなのに頑張るな…」

チエイヌ「まあラーメンを探究する気持ち、お前にもわかるだろう？」

エボルト「まあな。」

チエイヌ「だがお前は研究してどうする？店でも開くのか？」

エボルト「店…？俺がか？」

チエイヌ「ああ。」

エボルト「考えてみるのもありだな…」

チエイヌ「必死に考えろ、宇宙人。着いたぞ。」

エボルト「おつ、よし食べるか。」

俺は人口機械生命体のロイミュード000。

死神と呼ばれた男だ。今は仮面ライダーチェイサーで、とあるラーメン屋台でアルバイトをしている。

今日は休日、恐らく天下一品に昼ごはんを食べに向かっているとこだ。

天下一品、天一の名で親しまれているこつてりスープが魅力のラーメン屋だ。

ちなみに今日はバイト先の常連で俺と同じく人外であるエボルトというやつと食べに来ている。

チェイス「暇が聞かれたと思ったらやはりこういうことか。」

エボルト「人外同士、ラーメン食べながら語ろうじゃねえか。」

チェイス「少なくともお前の場合その体は人間のものだろう。」

エボルト「ま、まあそうだが…」

チェイス「借りたものは返す、人間のルールだろう？いつかはその体、自由にしてくれ。」

エボルト「まあそのうちな。」

チェイス「不幸だな体の持ち主は。」

エボルト「ちなみに今日h…」

チェイス「天下一品だろう、このルートでどこに行くかぐらい分かる。」

エボルト「そうか…」

チエイス「俺はこつてり派だが…今日は味噌ラーメンを食べようと思つてな。」

エボルト「自分の店の参考にするのか？」

チエイス「まあな。1回食べただけではすぐに落とし込める訳では無いが…」

エボルト「バイトなのに頑張るな…」

チエイス「まあラーメンを探究する気持ち、お前にもわかるだろ？」

エボルト「まあな。」

チエイス「だがお前は研究してどうする？店でも開くのか？」

エボルト「店…？俺がか？」

チエイス「ああ。」

エボルト「考えてみるのもありだな…」

チエイス「必死に考えろ、宇宙人。着いたぞ。」

エボルト「おつ、よし食べるか。」

さあ…味噌ラーメン、しかと味わおうではないか。

ラーメン喫茶への道—04

よっ！

俺の名前はエボルト。

様々なラーメン屋を渡る地球外生命体だ。

今日は秋葉原のとあるラーメン屋に来たぜ。

とある仲間と一緒にな！

警察の人A「・・・」

エボルト「何を食べるんだ？」

警察の人A「俺に質問するな。」

警察の人D「やっぱり質問は答えてくれないんすね…」

エボルト「この人怖い。」

怖いけど、家族思いのいい警察の人間ということも俺も理解している。それでも怖いよこの照井って人。

警察の人D「あ、俺はらーめん大とビール。」

エボルト「警察官なのがいいのか？」

警察の人D 「まあ今日と明日とお休みだしな。」

エボルト 「そうか。」

警察の人A 「俺は家族が待つている、武将らーめんの大のチャーシュートッピングだ。もちろんにんにくは盛る。」

エボルト 「家族思いつてなんだっけ。」

にんにくマシマシで家に帰る一家の大黒柱、やばい。

ちなみに俺はからしマヨチャーシュー丼と得らーめんの中だ。

店員 「食券お預かりします、麺の硬さ味の濃さ油の量どうしましょ？」

警察の人D 「硬め濃いめ多めで」

警察の人A 「普通普通多めで。」

エボルト 「じゃあ俺も硬め濃いめ多めで」

店員 「硬め濃いめ多め×2、普通普通多め1ですネ、ライスどうしましょ？」

このお店はライス無料なのだ。しかもおかわりも無料。

警察の人D 「大盛りで」

警察の人A 「普通で」

エボルト 「大盛りで」

店員 「わかりましたー、こちらのお席おかけなってお待ちくださいー」

照井さん、歳か。

警察の人A（俺も歳だな…）

そして俺たちが着席して数分も経たぬうちに…

店員「はいライス大盛り2つ普通1つ先におきますねラーメンお待ちくださいー」
早い。提供スピードが早い。

事前のリサーチでは一度に4杯まとめて麺を茹でスープを用意するといった調理方法で、かなり忙しそうだ。

と感傷に浸っているとすぐにラーメンの準備ができたようだ。

店員「普通武将チャーシュー、硬め大、硬め得行きますー」

店員「はいまず普通普通武将チャーシューですどうぞ、はい次硬めらーめん大どぞ、はい最後硬め得ですー」

店員「ご飯足りんかったら言ってね、あと熱いから気をつけてねー」

すぐくフレンドリーな店員さんだ…

そしていざ実食…といこうか。

『実際の味は読者のみんなが確かめてくれ！』

エボルト「美味かった…」

警察の人A「そうだな…おつとこの通知は嫁からの鬼電…俺は先に帰らせてもらう。」

警察の人D「お疲れ様です照井警部。」

警察の人A「ああ。それじゃ」

照井さんは帰っていつt:

店員「ありがとうございますーお忘れ物ないようにー!」

フレンドリーで親切な店員さんだあ。

警察の人D「とりあえず俺たちはどっか飲みに行きますか」

エボルト「そうだな、行こうか」

今日も美味しいラーメンを食べ、美味しい酒を飲む、いい生活だ。

<その頃一方:>

警察の人A「そういえばあのエボルトというやつ…何者だ…?」

緑の人「地球外生命体エボルト…という情報しかもまだ掴めていないが…きつとおいし

いラーメン屋を作ってくれることになるだろう…」

警察の人A「あいつがラーメンか…」

緑の人「気になるかい?」

警察の人A「ふつ…俺に質問するな。まあ期待しておくか。」

緑の人「おっと、君が質問に答えるとはね、予想外だ。」

警察の人A「そうか。」

緑の人「ああ。」
そんな期待をされていることをまだエボルトは知らなかった…